

Okubo, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., & Suzuki, H. (2014).
The lateral posing bias in social exchange.
Psychonomic Society's 55th Annual Meeting,
Hyatt Regency Long Beach, Long Beach, California, USA.

大久保 街亜

カリフォルニア州ロングビーチ。この地名を聞けば太陽の降り注ぐ砂浜を想像するのではないだろうか。少なくともわれわれはそれを期待していた。今回のPsychonomic Society Meetingのポスターでサーフボードがモチーフになっていたことも、その期待を高める一因となった。そう考えたのは、われわれだけでない。11月に学会でロングビーチに行く共同研究者に私が言うと、彼はサーフボードを忘れるなよと冗談をめかして言ったくらいである。

ロサンゼルス国際空港から車で45分ほど離れたロングビーチは、11月の末でも昼間なら25度を超えるような良い気候であった。乾燥していて、風が心地よい。日本で言えば初夏の陽気であろう。まさに常夏のカリフォルニアである。われわれが滞在した1週間の間、天気はとても良く、全くもって申し分なかった。

しかし、ロングビーチにはビーチがなかった。正確にはあったのかもしれない。しかし、われわれは学会会場の近くでビーチを見ることがなかった。学会会場から見えるのは、そして、歩いていける範囲にあるのはヨットハーバーであり、ビーチではなかった。ハーバーの水は濁っていて、お世辞にもきれいとは言えないものだった。そしてへんな匂いがした。

学会会場周辺は予想よりずっと荒んでいた。会場となったホテルはロングビーチ市の中心部に近いのだが、周辺の治安はあまり良くなかった。学会会場の隣にあるショッピングセンターにはほとんど店が入っておらず、カリフォルニアの不景気を象徴しているようだった。正直なことを言えば、太陽の降り注ぐ砂浜を想像した身としては肩すかしを食らった気分であった。

もっともわれわれは学会大会に参加しに来たのであり、重要なのはその内容である。今回の学会大会も、相変わらずの盛況であった。初日は記憶研究の大家Larry Jacobyによる基調講演が行われた。それに続く数々のセッションで最先端の知見が披露され、それらに基づき討論が行わ



図1：Psychonomic Societyにおける発表の様子

れた。周囲に特に出歩く場所もないせいもあったのか、学会会場は例年以上のにぎわいで活気に満ちていた。

今年度のわれわれの発表は、ヒトが他人から見て信頼できるように見せるにはどのような行動を取るのか、左右差の観点から検討したものである。社会集団の中で協調行動が成立するためには、お互いの信頼が不可欠である。そのため、信頼を得るために、ヒトは協調性を示すシグナルを積極的に発信すると考えられる。われわれはこれまでの研究から、笑顔を浮かべたとき、顔の左側が右側に比べて信頼できるように見えることを見いだした。従って、他人から見て信頼できるように見せるためには、笑顔を浮かべ、相手に対して顔の左側を見せるようになると予測される。この予測に基づき、参加者にできるだけ相手が信頼できる顔を浮かべるよう求めたところ、多くの参加者が笑顔を浮かべ顔の左側を見せることが明らかになった。

今大会から、Psychonomic Societyの大会にもEmotion and Cognitionというセッションが用意され、われわれの発表はそこに割り当てられた。これまでは感情に関するセッションがなかったため、表情を重要なテーマとしている我々に取っては重要な変更であった。この変更のおかげもあり、共通あるいは近しいトピックに関する発表がまとまって行われた。この領域の研究者が一同に会するような発表の場で、多くの研究者と議論を交わせたことは大きな収穫となった。